

「私は」何ができるか

板野中学校長 吉野教夫

光陰矢のごとし1993年度も終わろうとしています。今年度は国体、業者テスト廃止、観点別評価の全面実施等、多忙のなせる業か、いや充実した年であったように思われます。本校、第3学年団の1年間の同和問題学習の歩み「峠を越えて」が発刊されました。この冊子は部落解放への「峠」をめざして生徒たちと共にあえぎ苦しみ、また励まし合いながら闘ってきた記録です。

本校の取り組んでいる全体学習については本文中に説明がありますが、簡単に説明しますと一学級の公開授業を学年全体が参観し、次時に学年全体で公開授業の内容を深めていこうとするのがねらいです。また、学校全体学習も年3回行なっています。つまり一学級だけの密室的な授業ではなく、学年全体のレベルの向上を目的とし、学年の生徒が一堂に会し、自分の思いや願いを述べ合い、他の人の思いや願いを自分自身に重ねて、自己を確立し生活に生かせるようにするのがねらいです。

授業時間の取り方については、毎週木曜日の5時限、6時限の学校裁量の時間及び道德・学活の時間等を活用しています。中学生と言えば思春期、発言・発表が少ないと言われますが、授業内容をご覧いただきますとわかるように息の長い発言と同時に自分の立場を明確に発表しています。自分の社会的立場を認識したときの心の揺れは大きいものです。しかし、先輩や友人の本音で語る姿に触発され、自分の立場、今自分はどうかあるべきか、何をすべきかを次々に発言する生徒たちの姿が手に取るようにご理解いただけたと思います。本音で語るにより聞き手の心を揺さぶり、励ましとなり、支えとなり、人間関係の絆を強くしています。

この全体学習で学んだことは、「生かし、生かされ、生きる」ということです。共に学習する人を盛り立てて、生かすことによって自分も生かされ、一堂に会して学習する人たちがすばらしい力を発揮して力強く生きるということです。心を組み支え合っていけばどんなことにも耐えられ、難事も解決できすばらしい道が拓けてきます。事なかれ主義の社会の中で正しいことは勇気をもって発言できる生徒も育ちつつあります。何事にも誠実に自分の本音を出すことは勇気があります。また、不正を正し正義のために自分の信念を貫こうとすれば、その影響を受け、周りの人の賛否がはねかえってきます。しかし、正しいことは正しいと訴えなければ前進がありません。イギリスの詩人テニソンの言葉に「まだ一度も敵を作ったことのない人間は決して友人を持たない」とあるように、正しいと思う考え、意見を堂々と述べていくべきです。今なお部落差別が残存しているのも、はっきりした自分の考えを述べないことが起因しているように思えてなりません。本音で語り合える全体学習は、生徒たちにも私たち教職員にも共に学ぼうとする力、生きる力を与えてくれます。部落の解放も明るい展望が開けつつありますが、「私たちは」でなく「私は」何ができるか。何をなすべきかとして取り組まなければ実現性のないものになってしまいます。

部落問題のネックになっているのが結婚であります。憲法24条に「婚姻は、両性の合意のみに基づいて成立し……」とある中で今だに〇〇家と〇〇家の結婚式場と因習にとらわれている状態です。「私は」何ができるかを大切に、私の息子の結婚式は〇〇と〇〇の結婚式とし、招待状の両人の氏名で出しました。自分の出来得ることから実行していくべきだと思います。

話がそれましたが、今取り組んでいる全体学習を多くの先生方のご指導を仰ぎながら、常時指導と組み合わせ、確かなものへと研究を重ねたいと思います。生徒たちは毎年巣立っていきます。1年1年が勝負です。確かな学力と解放への力をつけ、人間が人間として人間らしく生きる生徒を送り出したいと思います。

この実践記録「峠を越えて」との出会いが、自分を見つめ直す材料となり、共に歩もうとする仲間が多くなるように期待します。

はじめに

(1) 本年度の授業記録について

全体学習がスタートして4年目を迎えた今年、忘れることがない授業が繰り返されてきた。本年度のこの取り組みのスタートは、学級開きの授業として取り組んだ詩『峠』の学習からであった。この取り組みについては第1回目の全体学習の指導案の主題設定の理由に詳しく述べている。学級づくり、仲間づくりがしっかりととなされていかなければ、生徒の本当の思いが語られていく同和問題学習は成立することはない。その意味において私たちは4月の出会い、学級開きのときから私たち自身の生い立ちや差別との関わり、部落との出会いを語ることを目指した。それは過去3年間の取り組みの中から、私たち教師が本当の思いを語ることなしに、生徒一人一人の本心は語られないという思いに達したからである。

今年の全体学習も、生徒の本当の思いが語られていく授業実践となっていく。その授業は、学習会での部落問題学習がスタートになった。本年度の授業記録は、第1回目の全体学習の3日前に実施した学習会での部落問題学習の記録から始まる。その授業記録と第1回目の全体学習の授業記録を読んでもいただければわかるように、学習会で語られた対象地区の生徒たちの思いや願いが、そのまま全体学習の場で吹き出てきた。それが第1回目の全体学習であった。あの授業の感動は、それ以後の全体学習の中にも生かされていく。何より本年度も全体学習の確かさは、学習会の取り組みをしっかりと踏まえた同和問題学習になったことであり、過去3年間を振り返るとき、学習会に対する発言、学習会で学んでいる内容を具体的に語る発言はごく一部の生徒の発言で終わっていた。しかし、今年は学習会の取り組みが全体学習を確かなものにしていき、全体学習で語られた学習会への思いが、今まで一度も学習会に参加していなかった対象地区生徒の目覚めや立ち上がりを生んできた。それは学習会の参加者が増えて、毎年夏休みに実施している学習会の一泊研修で燃え上がるような部落問題学習をつくりあげていく。その学習記録、キャンプファイヤーでの語り合いの記録も掲載した。本音をぶつけ合う生徒、その生徒に身体を張って応える教師、教育とは本物と本物のぶつかり合いだと思う。教師も生徒もその両方が仲間によって解放されていく。その取り組みが2学期以降の全体学習の中に生かされていった。本年度の第1回から第6回の全体学習、その一つ一つの場面が鮮やかである。そんな授業にしていたのは教師自身が差別という檻から解放されていったからだと思う。それは指導案（主題設定の理由）を読んでもいただければご理解いただけると思う。

そして何より、本年度の取り組みが私たちにとって大きな喜びであったのは、生徒一人一人のひたむきさであり、一生懸命に取り組んだからである。その姿が私たち教師集団を励まし続けた。第6回目の全体学習終了後、進学一辺倒になりがちであり、状況を生徒たちは大きく変えてくれた。互いの進路を静かに見つめ合い、その思いや願いを語り合う授業が成立する。その授業が一人一人の大いなる頑張りを引き出した。本年度はその進路公開の授業もまとめることができた。その授業の中で自らの生き方をつかんだ生徒もいる。

3学期、全校で映画「学校」を鑑賞した。中学3年という最も感動する時代、その年に封切られた名作を自らの本心を語り合った掛け替えのない仲間をみた喜び、それはいつまでも心の中にあの映画の場面と重なって刻まれていくと思った。翌日、その映画に寄せる思いを語り合ったとき、とてつもなく大きな感動が教室に溢れるそんな授業が成立していく。どうしてそんな授業になったのか。それは生徒一人一人の本心を語り合えた全体学習という取り組みがそんな授業にしていたんだと確信する。そして何より忘れなければならないのは、最後の同和問題学習として取り組ん

だ『峠』という資料の授業である。『峠』という作品は、私たち教師集団のメッセージである。あの授業の最後の場面、「部落差別を始めとする様々な差別をなくすことは、みんなにとってどんな意味があるのか」という問いかけは、私たち教師自身への問いかけであった。被差別の子どもたちへの同情ではなく、私たち教師自身の生き方として、私たち教師自身が幸せになるために部落差別をなくしていく。そんな確かな営みにしていくために、生徒たちと考え合ったあの授業、かつて一番綺麗事を言ってきたのが教師自身であった反省を自分自身のものとして、これからも頑張っていきたいと思う。そして、私たち教師がどの学年に、どの学校に変わろうとも、本心を語ってくれた生徒たちを決して裏切ることなく、部落解放の主体者として生きていくことを一つの指導案や授業記録に誓う。

今一度、全体学習についてまとめておきたい。

※

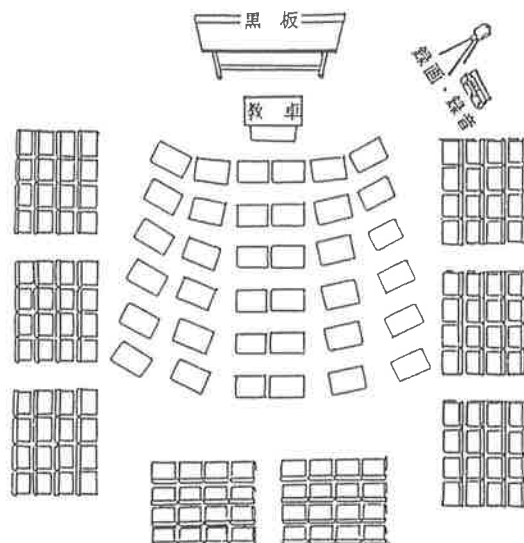
(2) 学年全体で取り組む同和問題学習（全体学習）について

① 全体学習のねらい

学級には学級としてのカラーがあり、それぞれの実態にあわせた実践がある。しかし、私たちの同和問題学習は常に学年全体が同一歩調で歩むことを目指した。それは私たちの問題意識や自覚、もっと言えば解放にかける情熱を最も高いレベルにある同僚の位置まで引き上げることであり、すべての生徒を同じ位置まで引き上げることである。また、一人の生徒の悩みや苦しみ、不安を全員が共有していこうとする営みとなり、教師としての苦しみや迷いを分かち合おうとする営みへと発展していきつつある。

同和問題は学級だけの問題ではない。国民的課題と同和対策審議会答申に提起されているように、生徒・教師一人一人が自分の問題として「何ができるか。何をなすべきか」各自が自覚しなければ実践に結びつかない。一学級の密室的な授業を学年全体、学校全体へと発展させ、同和問題に対する自分の考え方を赤裸々に語り合い学び合うことにより、自分のあるべき姿を見出し、いこうとするのがねらいである。

② 全体学習の配置



③ 方法と手順

一つの学級の授業（公開授業）を学年または学校全体の生徒・教師全員が参観し、引き続いてその授業の内容や主題について学年全体または学校全体で話し合い（全体授業）を行う。この二時間連続して体育館で行う授業を全体学習と呼んでいる。

公開授業は学年または学校全体で参観する。公開授業終了後10分間の休憩の後、全体授業に移る。全体授業においては、まず公開授業についての生徒の意見を求め、その後生徒一人一人の同和問題に寄せる思いを学年または学校全体で深め合っていく。全体授業においては教師自身も各々が自らの同和問題に寄せる思いを語っていく。

④ 全体学習の成果

- ・全体学習の取り組みは、同和問題に対しての意識の変容に大きな力となった。それは全体で取り組むことによる連帯感の芽生えとあいまって息の長い発言もできるようになった。学級単位の取り組みであればここまでの盛り上がりはなかった。「みんなでやっていく」ことの意味は、中学生にとっては我々教師が考える以上に大きい。

- ・どの学級も同じレベルで同和問題を考えていくための力になった。「学級＝全体」のサイクルはすべての学級が、同和問題について同じ内容、同じレベルで考えることにつながる。一人の問題が学年全体の問題となり、一人の問題提起が全体を揺り動かすことになっていった。どの学級であっても日常会話の形で同和問題について話すことができるようになる。

- ・全体場で発言することの意味は大きい。生徒にとって部落差別解消への実践とは、自分の考えを発表し、発表する中で自己の考えを確立し生活の中に生かしていくしかない。全体場での発言は生徒にとっては生徒なりに責任を伴うものである。

そんな自覚が生まれ、自らの思いをぶつけた発言がある。全体授業を通して対象地区の生徒たちが、自らの社会的立場を自覚し誠実に立ち上がっていきこうとする発言、いわゆる部落宣言が多くあった。個人的に部落出身であることを打ち明けられた生徒もいた。私たちも生徒も「信頼」「仲間」という言葉の重みとそれに伴う苦しさをつかんでいった。自分自身の問題として考えざるを得ない状況はそうした中から生まれてきた。

- ・対象地区外生徒について言えば「差別する側」にいた自分を自覚し、その差別心を洗おうとする姿勢が生まれつつある。多くの地区外生徒が絶句し、涙を流す姿が見られた。「私が部落出身じゃないからこの学習に本気になっていないなどと思われたらくやしい。部落出身の友だちのためにやっているんじゃない。自分のために取り組んでいるんです」という発言がある。

- ・全体学習を生徒間の話し合いにとどめず教師自らも参加していくことによって、教師・生徒が一体となった学習を展開することができる。私たちは教師としてという以前に一人の人間として生徒の前に立ち、生徒と共に語り合うことの大切さと苦しさを共有することができる。「今日、全体学習の時、A先生が、自分の本当の気持ちを言ってくれたことが本当にうれしかった。先生たちも頑張ってください。お願いします。私たちももともと頑張らなくてはいけないと思います。先生に負けられないからね」という生徒の言葉となった。

- ・全体学習は各クラスの独自性を失うものではない。個々の問題については担任の力によらなければ解決していかない。事実学級独自のカラーはある意味では鮮明になっていき、生徒と共に考え苦しむ姿があった。しかし、全体授業に取り組む中での基本的な構え姿勢は共通なものとなり、根本的なところにおいて共通の思いが存在した。したがって、あるクラスの一人の生徒の問題が常に全教師の問題となり共通の課題となっていく。